まかれたリサイクルの種

佐野幸子(ゆきこ)さん
主婦　岩本(48歳)

「資源を生かし福祉をはかろう」という発想から研さんを重ね活動している市職員の「リサイクル研究会」が、市民に呼びかけたのが、ミニシンポジウム。ゴミを生き返らせた見事な作品から、物の奥に潜む「いのち」に目を向けさせてくれた清掃工場の職員によるミニ・リサイクル展。

実践を持った職員たちの自主的な働きによって、富士市にリサイクル文化の種がまかれたような気がします。

経済の高度成長に伴い、物欲にとらわれてしまった私たちに、〝資源をみつめ直そう〟の呼びかけは、失われつつある心の豊かさへの回復を願う運動なのだと受けとめました。

まかれた小さな種が、やわらかな地で芽を出し、美しい、思いやりのある文化の実をいっぱいつけた樹になるよう、みんなで慈(いつく)しみ、育てたいですね。

大事にする心が大切

小野田　実さん
自営　鷹岡本町3(52歳)

鉛筆は小さくなったらサックをはめて使い、消しゴムは穴をあけてひもを通し、下敷きに縛って使っていた自分の子供時代に比べると、今は恵まれていると思います。

とは言うものの一方で、物を大切にしない現代の風潮は、昭和ヒトケタ生まれにとって納得できません。

物は壊れなければ新しい物を購入しなかったのに、今は修理などせず、どんどん物が捨てられています。「もったいない」とはみんな思うのでしょうが、時代に慣らされてしまっているのか、軽い気持ちで捨ててしまいます。再利用のための修理や保管のコストを考えると、場合によっては新品を買った方が安くつく場合もあるでしょう。しかし、物を大事にする心も大切にしないと、人間の心も荒れてしまうような気がします。

「結局は、金がすべて」という考えにつながっていくように思えてなりません。

中国浙江省嘉興市訪問友好調査団の副団長

望月敏男(もちづきとしお)さん

伝法2丁目　(63歳)

去る五月二十二日から二十八日まで、中国浙江省嘉興市(せっこうしょうかこう)を渡辺市長を団長とした総勢十三人の友好調査団が訪問しました。

嘉興市が、中国において富士市同様〝紙〟の産地であることから、紙業界を代表して参加されたのが望月さん。副団長の要職を務めました。嘉興市は、上海の近くで人口三百万人(都市部は二十万人)、紙・毛織物・絹織物・弱電製品等軽工業を中心とし、農水産業のバランスもとれた魅力ある都市です。国際友好都市提携を検討している富士市にとって、今回の訪問は、両市の友好関係の糸口を開いたもので一行は、熱烈な歓迎を受けました。

「誠実・親切な民情と農村に行っても必ずある緑のトンネル(主としてプラタナスの街路樹)が印象的でした」とは望月さんの感想。友好調査団副団長の職は終わっても望月さんの今後の活躍が期待されます。